



「そのときの出逢いが」

上杉山中学校同窓会 会長 森 淳志

(二回生)

出逢い
そして感動

人間を動かし
人間を変えてゆくものは
むずかしい理論や
理屈じゃないんだなあ

感動が
人を動かし
出逢いが
人間を

変えてゆくんだなあ：

題名・前文は、「相田みつを」の文ですが、私たちの中でも、出逢いや感動が私たちを成長させてくれていると感じる事があります。オリエンピックや甲子園の高校野球大会を見て感動した子供たちが、その姿を目指して努力し、後にオリエンピックや甲子園の高校野球大会に出场したといった話を聞くことが多々あります。出逢いや感動が私たちを成長させてくれてる、とても大事な事だと感じます。

出逢いと言えば、個人的な話ですが、

杉山臺

会報第12号
令和元年10月19日(土)
発行所
仙台市青葉区上杉6-7-1
上杉山中学校同窓会
発行責任者 森 淳志



上杉山中学校 校長 數本芳行

時代を貫く誇り高き上中魂と母校愛

六月に会津の施設に入所していたものの元気だった父親を思いがけず失いました。

遺品の中に中学時代の写真が多く出てきました。生前、中学時代の同窓会に度々出席して楽しかった事を笑顔で語っていた事を思い出します。誰にとつても、中学時代は思い出深くまた、出身中学校は人生の中での拠り所になつてゐるのではないかと思ひます。

PTA広報誌「かみすぎやま」にも寄稿させていただきましたが、初任以来三十年ぶりに上杉山中に戻ってきました。赴任以来感じてゐる事を記したいと思います。

あらゆる場面で出てくる「上中魂」という言葉。そこに込められた思いははかり知れないものであり、上中生としてあるべき姿を思い描きながら、毎日の学校生活を送つてゐる健気な姿には感動を覚えます。

入学式での校歌披露の後や対面式で上級生から新入生に向けてのメッセージにあった「真の上中生となるために…」という一節には、上級生が歩み成長し内面に芽生えさせてきた母校愛の片鱗を感じざるを得ません。そして後輩達にもその思いを持つてもらいたいという気持ちが伝わってきます。

集会や儀式の度に歌われる校歌は在籍していきました。一昨年創立七十周年を迎えた上杉山中。その輝かしい足跡については、周知のことここでここに記すまでもありません。昭和・平成とそれぞれの時代でしっかりと根を張り、各界で活躍する多くの諸先輩方を輩出してきた上杉山中。時代は令和になりました。新たな出逢いが生まれ、そこからお互いが成長する機会が増える事を期待したいのです。

同窓会の集まりや総会に参加する事で、新たな出逢いが生まれ、そこからお互いが成長する機会が増える事を期待したいのです。出逢いや感動が私たちを成長させてくれてる、とても大事な事だと感じます。

出逢いと言えば、個人的な話ですが、

を育みそして表現していけるような気がします。執行部編集の「校歌新聞」には、作詞家・作曲家の方の思いを綴られていました。

毎年開催されている同窓会総会に向けての役員会に、参与として同席させて頂いています。森淳志会長さんをはじめ役員の方々のお話や込められた思い、また数々の行事の際に足を運んで頂いている事に、中学校在籍に時代に培いそして何年経つても色あせない深い深い母校愛を感じていてころです。「私も上中出身です」と誇らしげに語る私の知人も多くいます。

「上中魂」という言葉が以前からあつたかどうかは解りません。しかし、開校以来、「仙台に上中あり」という上中生としての誇りは脈々と繋がつていて感じています。そしてそれが深い深い母校愛を育んでいくのだろうと思います。

五月、時代は平成から令和へと移り変わりました。一昨年創立七十周年を迎えた上杉山中。その輝かしい足跡については、周知のことここでここに記すまでもありません。昭和・平成とそれぞれの時代でしつかりと根を張り、各界で活躍する多くの諸先輩方を輩出してきた上杉山中。時代は令和になりました。新たに新たなステージに入りました。時代を貫く上中魂と深い母校愛で繋がつた上中窓生の皆様に幸多かれと願っています。

来年、開催の予定の私の中学時代の同窓会には、これまでよりも深い母校愛をもつて参加できそうです。

平成三十年度 同窓会総会報告

今野和賀子(一十五回生)

秋まつた中の平成三十年十月二十日(土)、青葉区上杉のパレス宮城野において、平成三十年度上杉山中学校同窓会が開催されました。まさに秋日和の中での開催となり、同窓生を中心に五十六名の方々にお集まりいただきました。

今回当番幹事

となつた私たち

二十五回生も、

仙台市内在住の

同期生はもとより、他県各地(神戸、東京、横浜など)から、総勢二十四名がこの日のために集まりました。二十五回生

メンバーの一人、東北放送アナウンサー

の藤沢智子さんの司会進行のもと、十二時半から、第一部の総会と第二部懇親会

が行われました。

第一部総会では、菅原和子副会長の開

会宣言後、校歌斉唱、物故者への黙祷が

行われ、森淳志同窓会長よりご挨拶いた

だきました。

その後、同窓会執行部の一員として永

年にわたりご尽力いただいた玉

手信一さん(十七回生)の執行

部辞任のご挨拶

をいただきまし

た。長い間お世

話になり、ありがとうございました。

総会に入り、吉川逸郎副会長が総会議



長に指名され、平成二十九年度の事業報告・会計予算案についての報告・協議が行われました。全ての議案が無事承認され、飯淵雅国副会長の閉会宣言で第一部総会は幕を閉じました。

第二部懇親会に入り、まず、母校上杉山中学校亀倉靖宏校長先生より同窓会への祝辞をいただきました。

二十五回生館崎直史さんの乾杯の挨拶で始まつた宴席では、おいしい食事をいただきながら、テーブルごとに思い出話を花を咲かせ、近況報告を交わすシーンがあちこちで見られました。笑顔あふれ大いに盛り上がる懇親会となりました。

何と言つても、毎年恒例のアトラクション、かわいい後輩たち上杉山中学校合唱部による歌声は、やはり圧巻でした。清らかな美しい合唱の調べは、参加者一人一人の心を潤し、最後の響きを待つて送られる大きな拍手は、心豊かなひとときを共にすることができた喜びで満たされていました。



本誌題名『杉山臺』について

第四代仙台藩主綱村公は、東照宮から堤町の台地一帯に杉を植えて保護し「杉山臺」と称しました。城下の各街から武家屋敷を通つてこの杉山臺に向かう道を上下(かみしも)の位置により「上杉山通・中杉山通・杉山通」と呼称しました。これら町名は二本杉通・光禪寺通など、及び北番丁とともに、江戸時代から昭和四十五年まで呼称されていた歴史ある町名です。

我が母校が所在する学区地域の歴史を振り返つてみたとき、校名とともに、現在に残る上杉の地名が生まれる根源となつてゐるにしえの地名『杉山臺』がそこにあるのです。

我が母校が所在する学区地域の歴史を振り返つてみたとき、校名とともに、現在に残る上杉の地名が生まれる根源となつてゐるにしえの地名『杉山臺』がそこにあるのです。

(一回生 芳賀)

本会報の題字は、元会長木皿謙氏の揮毫によるものです。

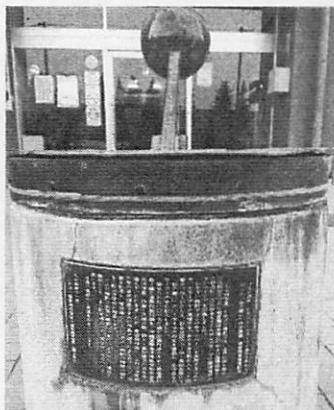
今年度末定員	153名
1年	174名
2年	149名
卒業生累計	21,813名

四十五年目のタイムカプセル

泉 英和(二十六回生)

令和元年の記念すべき同窓会の当番幹事を務めます二十六回生を代表してご挨拶申し上げます。

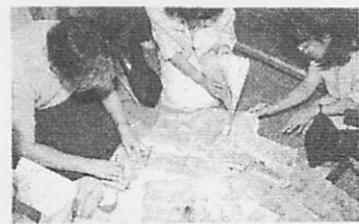
校庭に向いた校舎の玄関前に、かなり年代物の「日時計」があります。この日時計は今から四十五年前の一九七四年、私たちが中学三年の時に設置されたもの。当時シチズン時計が全国の小・中・高校生から募集した作文コンクールで、同期生の酒井理恵子さんが一万通を超える応募の中から最優秀作品に選ばれたのを記念して学校に贈呈されたものです。



45年経った今も時を刻み続ける日時計

月十二日にタイムカプセルの開封式を行われました。

集まつたのは当時の在校生の三分の一近く保存状態が悪く、中に入っていた紙も痛んでボロボロになっていましたが、それでも会場のあちらこちらから歓声が上がり、参加してくれた同窓生は中学時代にタイムスリップし、互いに旧交を温め合うことができました。



正面玄関前の日時計
仙台市
上杉山中
(千田彰武校長、生徒
四百八人)の二十六
年前の生徒たちが残し
たタイムカプセルの開
封が十二日、当時の生
徒ら約二百七十人が集
まって行われた。

当時の新聞記事

思い出に浸る

タイムカプセルは、
正面玄関前の日時計。

昭和四十九年十一月の
設置時、作文や似顔絵
など、クラスごとにま
とめたものをガラスピ
ンに詰め、封印した。

元生徒たちは、四半
世紀を経た自分の作文
などを見て『写真』、
『懐かしい』などと声

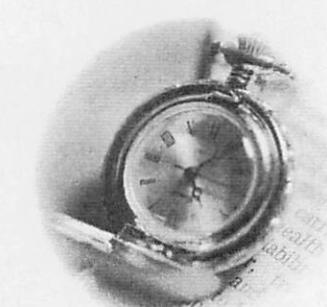
を上げ、久じぶり
に再会した級友と
当時振り返って
いた。当時三年生
だった高橋理恵子
さんは「好き
だつたアラン・ド
ロンの映画のこと
が書いてあった。
懐かしいが少し恥
ずかしい」と話す
ていた。

それからまた二十年近く…。「二〇〇〇年」のミレニアムに続いて今度は「令和元年」という、これまた時代の節目に同窓会の当番幹事がまわってくるというのも何か巡り合せを感じます。

私たちが上中を卒業して早四十五年。当時と比べると、放課後の遊び場だった農学部は移転して更地になり、思い出深いままほこ型の体育館は建替えられると、不思議と懐かしい気持ちが沸いてきました。また先生方から現役上中の部活動の活躍ぶりを聞かされると、何か誇らしい気持ちになります。あの時埋めたタイムカプセルは、四十五年経った今も私たちの心の奥底に大切に保存されているようです。

聞くところによると市内の中学校で世代を超えた同窓会が開かれているのは、五橋中と上中だけだと。それが「伝統」の持つチカラなのでしょう。私たち二十六回生もそんな思い出深い愛すべき母校の発展のために、できるかぎり協力していきたいと思っています。

それではみなさん令和元年十月十九日、パレス宮城野でお会いしましょう！



開封式後に勝山館で開かれた同窓会は当時の学年毎に会場を変えて開催

上杉山中近況報告

教頭

菅原

徹

中学生の主張

努力の先に

仙台市立上杉山中学校三年

藤本

和

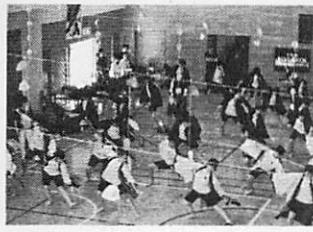
す。

上杉山中学校は、ここ数年五〇〇名弱の生徒数で推移しており、四七名でスタートしました。一学年五学級、二学年五学級、三学年五学級、特別支援二学級の計十七学級、職員数およそ四十名で運営されておりま

また、文化面でも吹奏楽部が県大会(小編成)で金賞を受賞し、九月に青森で開催された東北大会へ出場しました。合唱部も全日本合唱コンクール・NHK学校音楽コンクールへ出場するなど、充実した活動をしております。

上杉山中学校の生徒たちは現在も文武両道、仙台を牽引する伝統校として活躍しています。特に学習においては、個人研究をはじめとして生徒自らが課題に取り組み、自分自身を高めていく力が身に付いています。仙台市標準学力検査、全国学力学習状況調査とともに学力の高さがその結果にも示されています。

今年度は運動面での活躍が目覚ましく、令和元年度の市中総体では、男子バスケットボール部 女子卓球部個人の優勝を筆頭に、男子バスケットボール部、陸上部、女子卓球部、女子剣道部、男子柔道部、男女水泳部が県大会に駒を進め、なかでも、女子卓球個人、陸上女子走り高跳び、男子柔道が優勝、男子バスケットボール部、女子卓球部はベスト4に入る活躍でした。また、東北大会へは県大会優勝の競技に加え、水泳部男女が出場しました。八月に近畿ブロックで開かれた全国大会へも、女子卓球、女子陸上走り高跳び、男子柔道部が出場し活躍しております。



毎年、上中生らしさが發揮される大樹祭では「L8P(LLOOP)」と広げる繋げる上中の輪」をテーマに、これまでの伝統を引き継ぎつつ、新たな上杉山中学校を作り上げようという心意気で上中文化を地域へ発信しました。

これからも仙台市の中学校を先導する活躍を諸先輩方へお見せできるよう頑張ってまいります。御支援、御協力をよろしくお願いいたします。

「あなたの長所は何ですか。」と聞かれて、「ここまで努力したんだから、ぜったいにできる。」という、大きな自信が湧いていました。たった数分の出来事のはずが、私はいつも特に何か努力をするわけでもなく、挑戦することもない。そんな、いつも自信のない自分が嫌いでいた。

そんな私は中学校に入学しソフトボールに出会いました。かつて先輩や友達に囲まれ、部活動を本当に楽しんでいました。特にソフトボールという競技に惹かれ、上手くなつていく自分が頼もしくもありました。自然とソフトボールに費やす時間も増え、先生に褒められることも多くなり、「もっと部活動の時間が増えればいいのに」と思うほどでした。しかし一年の後半、わたしはスランプに陥りました。自分なりに努力はするものの、一向に良くならず、何がいけないのかも分からないま、時間だけが過ぎていきました。「私にはソフトボールの才能が無いんだ。練習なんか、やつても意味ない……」そんなことを考えるようになり、少しずつ楽しさが分からなくなつていきました。

そんな時、先生に「和はフォームが崩れている。すぐには直らない。できることを自分でやつてみろ。」と言われ、はつとしました。落ち込んでいる場合ではない。私にはまだできることがあるはずだと思ったのです。友達と一緒に公園で素振りをしたり、休みの日に母とキヤッチボールをしたりと、私は部活のない日も自主練をするようになりました。

また、今までやらなかつた筋トレを自分で調べ、更に体重管理も行うようになりました。今できることは、何でもやろう。そう思つて必死に取り組みました。

そして最後の中総体。まだまだ調子が戻つてない私は不安でいっぱいでした。相手の前で不安そうな顔をしてはいけないと心に誓い、迎えた一試合目。これまでとは違う、うまく進めることができました。その勢いに乗った二日目の試合、同点のピンチで、監督は二つの四球でわざと満塁にするという作戦に出たのです。正直今すぐにこの場から逃げれど祈ります。

和

藤本

編 集 後 記

本年五月一日より「令和」という新しい時代を迎えることになりました。創立七十周年を越えた上杉山中学校同窓生の中には激動の昭和・平成の時代を生き抜いてこられた大先輩の方や平成生まれの若い世代も同じ中学校を卒業した

といふ語りと自信を胸に日々の生活を送つておられると思います。いつの世にも「不思と流行」があると言われる様に時代とともに変わり変わつてゆく風習や文化と時代を越えて変わらない社会的価値や道徳などを地に足を付けてしっかりと見つめ歩んでいただきたいと改めて感じさせる元号改変でもありました。

これから中学校を卒業する皆さんに幸多かれど祈ります。